

---

# 警視庁オカルト対策室

武上 湊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

警視庁オカルト対策室

### 【Nコード】

N4874H

### 【作者名】

武上 湫

### 【あらすじ】

合川。オカルト対策室長を辞退するな。我々の最後の希望だ…。辞職を覚悟した合川警部を待っていたのは、瀬戸際に立たされた世界の危機に立ち向かう最前線だった！。

## ―前書き

### ―前書き

本作は、2009夏ホラー用に執筆した物です。しかし、龍馬編の投稿のメドが立たない為、2009夏ホラーには出品せず、通常投稿する事としました。龍馬編の問題無い4話を期間限定で投稿する事も考えましたが、言い訳以上の意味がない為、完結している本作を投稿させて頂きます。

作者自身が怖がりな為、極力詳しい情景描写や心理描写を避けさせて頂きました。その為、読んだら眠れないような仕上がりにはなっていない。本格ホラーをお望みのマニアさんは、バックする事をお勧めします。

登場する各心霊スポットにモデルは存在しません。名古屋競馬場にも長良橋にも、心霊現象が起こった事実は有りません。

このように、作者自身が怖いのでホラーとして詰めていません。よって、本作の評価は無しと云う事とさせて頂きます。ご理解ください。

2009年7月23日

武上溪



## ―第1話左遷(させん)

### ―第1話左遷させん

合川あいかわは本来なら、出世コースに乗って地方の署長をやっているはずのキャリアだった。それが、警察庁の派閥争いに巻き込まれた。争いに勝った派閥の仕返しのとばっちりをくらい、この訳のわからない対策室に室長として着任させられた。

―警視庁オカルト対策室室長を命じる

辞令と一緒に渡された紙には、対策室の場所と、部下の氏名と略歴が2名分に、対策室の目的が書かれていた。

それによると、対策室は警視庁庁舎地下7階と有った。

「7階のどこだよ。だいたい、庁舎って地下7階も有ったか?。」

合川は地下鉄に揺られながら、つぶやいた。対策室の目的に目を落とす…。

―本年度より新設される当オカルト対策室は、各事件現場より、超オカルト自然現象として報告される事案を収集し、解析し、対策を講じる事を目的とする。

「どこの現場がそんな事を報告してるんだ?。有り得ない。」  
合川は言いながら、部下の略歴に目を移した。

皆川時政警部補  
警視庁交通機動隊勤務5年

平野俊太巡査

警視庁電算機犯罪課開発班勤務7年

「これじゃあ…何もわからん。」

合川は紙を背広のポケットにたたんで入れた。

霞ヶ関に向かう通勤ラッシュにもまれながら、合川は警視庁庁舎に飲み込まれて行った。

あいかわけいすけ

合川敬介27才。公安部課長から県警の署長に栄転するはずだったが、しかし、彼を引き立てていた警視が、警察学校校長に左遷されたと言う噂が流れて3日目に、封筒がデスクに届けられ自分も失脚した事を知った。

封筒のメモには、4月1日にオカルト対策室に出勤しなければ、辞表を提出せよと書かれていた。

合川はどんな派閥抗争が有ったのかを、知るポジションに無かった。ただ、失脚した警視からメールが送られてきた。

: Message

合川。オカルト対策室長を辞退するな。我々の最後の希望だ。

合川には意味不明だった。我々とは誰なのか？封筒の中身は何も答ええてくれない。

合川は庁舎のエントランスに入って、エレベーターの上を見た。  
「やっぱり地下は3階までだ。こりゃあ辞表を書けつて事か…。」  
いぶかしげに合川をよけて、エレベーターに向かう人並みに背を向けた。  
辞表を提出する時に詳しい事情が判るかもしれない…合川は外に向かつて重い足を上げた。

その背中に走ってくる足音がした。

170cmくらいの陸上自衛隊員風の男が、合川の前に回り込んできた。

「皆川時政警部補です。合川敬介警部でしょうか?。」

「うん?。そうか皆川か?。せつかく着任したが、対策室は地下7階だ。まだ、これから掘るらしい。できてるのは、まだ3階までだ。」

皆川は輝くような笑顔で笑った。こういう部下は得ようとして得られない。最悪な状況下で、土気モラルを保つ為には必要不可欠な人員だ。

「ここでは詳しくご説明できません。ご案内します。こちらに…。」  
皆川は半身になって、合川を見ながら促つなした。

皆川は、メインエレベーターの右手奥に向かって合川を導いた。  
トイレがあり、その横に廊下が伸びている。庁舎のメンテナンス用の部屋があり、作業員以外の立ち入りを禁じていた。

「まさか、フロアのモップ掛けか?仕事は?。」

「ここじゃ有りません。やらせれば、超一流の仕事をしてみせますが…。」

皆川はメンテナンスルームを通り過ぎて、さらに奥の作業用エレベーターの前で止まった。

合川は上を見た。

「ここはまだ4階までみただが?。」

「心配なく。乗りましょう。」

開いたエレベーターに向かって皆川は言った。

扉が閉じると、皆川はカードを取り出して、停止階パネルの下側に当てた。

ヒュッ。

とその部分が開いて、5 6 7のボタンが現れた。

皆川は7を押した。

「どついう秘密基地なんだ？。国会は知ってるのか？。」

「知りません。知ってるのは、総理と警察庁長官。命令系統としては、内閣調査室の直轄になります。…着きました。」

エレベーターを出ると、警備員の居るゲートがあり、そこで合川は自分のカードを渡された。

「着任。おめでとございます。お待ちしております。」

4人の警備員に敬礼で迎えられた。

厚いゲートが開いた。広いフロアを何だか分からない電子機器が埋め尽くしている。その間を20人近い人員が動いている。これは左遷なんてものではない。

何かの最前線に送り込まれたのだ。何か深刻な事態が進行している。そして、準備はまったく整っていない。

何故なら。室長の自分が、何が相手であるのかも知らないのだ。

―次話！

第2話自損事故に続く…。



## Ⅰ 第2話自損事故

### Ⅰ 第2話自損事故

皆川は合川を一段上がったデスクに案内した。ディスプレイが埋め込まれたデスクに、スタートレックのようなコマンダーチェアが付属している。

「相手は何者だ？。宇宙人か？」

「空間にメモリーされたデータ群：俗に言う、心霊エネルギーですか。」

「幽霊か？」

「そういう言い方も有ります。」

合川はフロア全体を見回した。

「今やってる作業は？」

「情報解析用の機器の立ち上げが最終段階に入ってます。同時にフロアの遮断試験も進行中です。」

「何からの？」

「空間メモリー群からです。基本的には電気エネルギーですので。」

「どれくらい前から、これを作ってた？」

「3年目に入りました。中断もありましたので：実質は1年半ですね。アフガニスタンやイラクで異常に死者が出て、空間メモリーが急激に増加しまして。それに伴って、空間ハードハッキングが増えたんです。」

「空間ハードってのは？」

「人体ですね。人体を失った空間メモリーデータが、新生児にダウ

ンロード出来ない為に、ハッキングを始めるんです。憑依ひょういと言えはお分かりになりますか?。」

「憑依ね。」

「交通事故の40%。殺人事件の20%。引つたくりの70%が、ハッキングによると言うデータに基づいて、オカルト対策室が秘密裏に設置決定されました。」

「つまり。それだけの%を俺達が背負うわけだ。」

「加えて、社会問題のほとんどが解消されるかもしれないと言う仮説もあるようです。」

「もう1人…平野は?。」

「呼びます。」

皆川はデスクから突き出ているマイクで平野を呼んだ。

平野俊太は150cmちよつとの小太りな若者だった。

「室長。お待ちしました。メンテナンスと必要なソフトハードの開発を担当しています。」

「で?。仕事はできる状態か?。」

「あと48時間で、機能させます。…とりあえず、こいつで始められます。」

平野は、抱えていたノートパソコンを開いた。

「どこのパソコンだ?。マークがないな…。」

「自作です。対空間メモリーデータ群用にハードから組み上げました。…見て下さい。皆川さんも。」

モニター画面には、トンネルの入り口側面に激突しているトヨタの写真が表示されていた。

「ひどいな…ドライバーは即死か?。」

「はい室長。身元が不明だったんですが、1時間前に判明しました。ジヨン ヨネナガ31才。フランス外人部隊に4年所属した後、プ

口の殺し屋になったと言われている人物です。」

「知ってる。公安部でデータを見た。何者かに依頼を受けて、来日中消息不明になった。」

「鑑識によれば、時速80kmで衝突しているそうです。ですが見て下さい。」

平野は事故現場の地図を表示した。

狭く曲がりくねった道路で、しかも信号が4ヶ所ある。ここで80kmを出したら、まずJRガード下のトンネルにはたどり着けない。その前に他の車に衝突するか、民家に突っ込んでいるはずだ。

「ジョン ヨネナガは、ここ以外には車を接触させていません。これが1点です。」

「まだ有るのか?。」

「はい。ここは有名な心霊スポットで、交通事故が年間を通じて絶えない場所です。しかし、この自損事故の後：一件の交通事故も報告されていません。加えて、窃盗から暴行殺人までも起こっていません。」

「何かが起こった。この自損事故は、他殺だと?。」

「ジョン ヨネナガは、空間メモリーデータ群によって殺害されたと考えられます。」

「理由が重要だな。心霊スポットが除霊された事も含めて。」

「調査命令をお願いします室長。」

「よし。ジョン案件として、調査を開始する。現場を見てみよう。」

現場は山手線のガード下に有る、通称塚ポケットと呼ばれる場所だった。

皆川が運転して、ジョンが走ったルートを走らせる。

「18時30分。時間帯は同じです。時速80kmどころか、30km出てないですね。」

完璧に渋滞していた。

「ジョンは…ここで仕事だったのか…移動中だったのか…皆川はどう見る?。」

「彼は、仕事の時には黒いリストバンドを両手首にする癖があったそうです。」

「してたのか?。」

「画像には写ってません。検死を行った医者に問い合わせました。あつたそうです。」

「すると…この塚ポケットにターゲットが居た事になる。」

皆川は車を塚ポケットのトンネルに進行させた。

トンネル内の歩道は、段差がなく白線が引かれているだけだ。ここにターゲットが居てひき殺す事は可能だ。

「床から安全装置が外れたコルトが見つかってます。射殺するつもりだったと思います。」

「なのに…80kmか。」

車はトンネルを通過した。

「誰が居たか…ジョンの視野の中に。」

「今のところ不明です。降りてみますか?。」

「そうだな。」

皆川はスーパーの駐車場に車を入れた。

200m程歩いて戻って、トンネル内に入った。

「心霊スポットって言う割には、気味が悪くないな。どうしてだろう…。」

「ここは犯罪多発地帯に共通する条件が無い場所として、研究されてます。」

「確かに。犯行現場特有の匂いがない。」

合川は、ジョンが激突した場所までやって来た。

「これは?。」

トンネルの内壁には埃が厚く付着している。歩道とその内壁の間に、四角い形のわずかな浮き上がりが見えた。

人差し指で埃を削ってみた。名刺大の紙が現れた。

合川は、手袋をはめて紙を拾い上げた。

「名刺だな。」

表面の埃を削ってみる。

「二荒 晴明：ふたら せいめい。博物学者…。知ってるか？」

「いえ。平野に聞いてみましょう。」

皆川は携帯を取り出した。

しばらく、皆川は平野と会話した。

「わかりました。二荒晴明は、去年の6月から雑誌の取材で全国の心霊スポットを巡っているそうです。」

「ジョンの事故現場に二荒は？。」

「雑誌の記事の取材日と一致してます。」

「皆川。二荒の現在地を平野に調べさせる。やつを保護する。」

合川は、大きな暗黒の穴を感じた。

そして、その暗黒の中に身を投じて行かなければならない事も…。

―次話！

### 第3話暴発

二荒晴明の身柄を確保出来ないまま、2つ目の拳銃暴発事故現場に二荒の影が…。オカルト対策室設置を巡る謎が明らかに！。

### ― 第3話暴発

#### ― 第3話暴発

合川と皆川は、オカルト対策室に戻った。二荒晴明の消息は出版社に問い合わせても不明だった。

「平野。不明と言うのは、どういう事だ?。」

「新幹線で名古屋に向かって移動中らしいです。二荒は携帯電話を持ってないんです。身に付けた電気機器は、全部壊れてしまつと言う事で…。」

皆川がうなずいて

「霊能者の中には、家電が壊れる人がいましたね。」  
と言った。

「…とりあえず、居場所が判れば連絡してもらつ事になってます。」

「待ちか…。」

「いや。室長。そつでもないんです。」

「と言つと?。」

「これなんです…。」

平野は、再び自作のノートパソコンを開いた。

仰向けに倒れた男の画像が表示されている。胸から血を流している。場所は道路脇の草むらのようだ。

「下地昭夫しちおの写真しゃしんだな。台湾のエージェントで、拳銃を暴発させて

即死しているのを発見された。1ヶ月くらい前だったな…京都だったか…。これがどうした?。」

「ジョンの場合と符合するんです。」

平野は、画面をスクロールさせた。

「ここは、鳥羽伏見ポイントと呼ばれる心霊スポットなんです。鳥羽伏見の戦いで最初の戦死者が出たと言う。」

「…となると、二荒晴明が現場に居た?か?。」

「その通りです。見て下さい。」

画面に、雑誌の記事が表示された。日時が同じだ。

「…この場所では、パンパンと言う音がすると言われているが聞く事は出来なかつたか?。」

「下地も副業で、殺人をやったと言うのはご存知だと思います。」

「待てよ…妙だ。下地は、自作で拳銃のコピーを製作できる人間だ。奴の銃が暴発?。有り得ない。これは気がつかнаかつた。」

「ジョンも下地も二荒晴明がターゲットだったって事でしょうね。」

「じゃあ、2人共二荒晴明が振り返りにしたのか?。」

「二荒じゃないでしょう。ジョンと同様スポットの空間メモリーデータ群だと思います。でも、きっかけが判らない。」

黙っていた皆川が口を開いた。

「それより、二荒が無事と言うのは?。空間メモリーデータ群に指向性が有るとでも?。」

合川は聞いた。

「指向性は無いのか?。」

平野が答える。

「集合体です。心霊スポット内の人体に単純な感情を励起させられるだけです。下地だけを励起させ、二荒は励起させないような事は出来ないはず。恐怖や怒り劣等感、悔しさ復讐心を励起された人体は、異常行動を引き起こす。サイキック能力を持っていたりすると、自らの体を破壊する例もあります。」

「じゃあ…二荒の振り返り討ちも今のところ有りか?。」

合川は、公安部で科学的説明が出来ない事件にたびたび遭遇していた。しかし、そこから心靈現象として踏み込む事は出来なかった。法廷は科学的根拠を元に法律を解釈する場だ。心靈現象は、科学的に取り扱える外側にある。このオカルト対策室は、科学の外側を埋める為に警察庁トップと内閣が秘密裏に設置したらしい。合川には、上からの公式な説明はないが…。

3人が煮詰まっている所に、内線電話が乾いた音を響かせた。合川が受話器を上げた。

「警備室です。内閣調査室の佐々木室長がお見えになってますー

「お通ししてくれ。」

「では。ゲートを開けますー

合川は

「内調の佐々木さんだ。聞きたい事が山ほどある…。」

と言つて、室長デッキからゲートエリアに歩いて行った。

皆川も平野も付いて行く。

佐々木憲広ささきのしひろは、機動隊の出身で、独断専行型の人物だった。それが嫌われて、出世コースから外れていたが、総理の指名で内閣調査室に着任した。

佐々木は、丸顔でノンキ者に見えた。身長も合川より低い。しかし、霞ヶ関の官僚組織を「へとも思わない」怪物として知られている。オカルト対策室が内閣と警察庁のみで設置されているなら、うつつつけの人物に違いない。

「合川くん。申し訳ない。説明抜きで、辞令も郵送で。コンピュータ関係の納入業者からさかのぼって嗅ぎ付けられてね…知ってるだろ？下沢拓したせたく。」

「はい。ポリスキラー下沢ですね。山際エトガー下沢トリオですか…。」



佐々木は、微妙な間を開けて頷いてからしゃべる癖が有った。

「うん…道路特定財源から50億引つ張って来て、この対策室を作ったんだがね。」

「50?憶ですか?。」

合川と一緒に、皆川も平野も部屋を見渡した。

「…。うん…下沢は2部が黙らせたんだが、警察庁の幹部クラスが聞いてないって怒りだしてね。それが山倉警察庁長官の対立派閥の餌食で、山倉長官の秘蔵つ子平警視總監の左遷になった。」

「平さんは2部の方も関わってますよね?」

「…。うん…でもまあここは、総理の一言で対策室は存続される事になった。」

「何が政府内で起こったかは…わかりました。でも、そこまでしてやる意味は何ですか?。」

佐々木の沈黙は、少し長かった。

「…アフガニスタン で50万人以上、イラクでは15万人。加えて中国の地震による死者。地球周辺の霊魂のキャパシティは90%を超えた。これによつて起こる事態は、人間の100%に憑依が発生をする。そうなつたら、人々は憑依した霊魂の想いを果たす為に行動してしまう。恨みを果たす為に、傷害殺人が関係のない人物に行われる。」

「誰でもよかつた…ですか?。」

「よほどの霊能者なら、誰に対する恨みか判るし、暴力衝動も抑える事ができる。だが普通の人間は、防衛本能と攻撃衝動が刺激されて、無差別殺人に及んでしまう。これは、すべての犯罪と、社会問題に及んでいる。放置すれば…2011年までに地球上の社会は崩壊する事がわかつている。」

「誰が言ってるんです?。」

「NASAだ。」

「宇宙開発の組織が?。」

「実態は、地球周辺の空間メモリーデータ群の研究をしている機関

だ。」

「にわかに信じられません。」

「有人惑星探査はアポロ計画で中止されたのは知ってるだろう?。」

何故か?。宇宙飛行士の全てが、憑依されて戻って来たからだ。」

「まさか…。」

「NASAは、宇宙飛行士を守る為に研究を開始した。その研究の中で、犯罪との関係が判明した。宇宙船や宇宙服予算の60%は心霊エネルギー遮断に費やされてる。この部屋にも使われてる技術だ。」

「そこまでハッキリしてるのに、秘密裏なのは何故です?。」

「研究はされている。だが…。」

3人は佐々木に向かって言った。

「だが?。」

「うん…憑依を完全に止める手段も、空間メモリーデータ群を減らす方法も…まだ無い。これは最高機密だ」

「無いって、2011年って2年後ですよ?」

「NASAは、日本の技術力に最後の望みをかけている。ここに有る機器は、日本の研究機関が極秘で開発したものだ。君達も適性と機密保持の面から選別されてる。自信を持って欲しい。」

「手段は無いのに、何をすれば良いんです?。」

「世界はあきらめている。君達はあきらめない事が仕事だ。それが出来る資質が君達に有る。」

合川は佐々木に言った。

「この3人でリードしろと?。」

「うん…世界の全ての政府がバックアップする。孤立してる訳ではない。」

「しかし。心霊関係の専門家が何故、居ないんです?。」

合川はフロアを見渡した。

「うん…君達の前任者は、全滅した。」

「全滅って?。」

「彼らは霊能者だった。霊を断てる技術は有ると言っていたが…。4年前…まだ対策室の準備段階だった。憑依した人体から徐霊するメカニズムのデータ採りの最中…完全に体に乗つとられそうになつて、体に火をつけて自殺した…。」

佐々木は目頭を手で覆った。

「君達に適性が有ると言つたね。君達は、憑依に強い体質で有る事が判つた。君達は空間メモリーデータ群が95%の場所まで憑依されない。この世界中で、君達だけがね。」

「…我々の最後の希望。」

「うん…平警視總監が君達を称していたな。」

佐々木は立ち上がった。

「合川室長。皆川副長。平野技術長。人類を救つてくれ。頼む…。」

佐々木は深々と頭を下げた。

靈魂が自身を高める為のハードウェアである人体を破壊し尽くすまで、2年…。

有るのかどうか判らない解決策を見つける任務が開始された。心の準備も訓練もなく、突如サッカー日本代表監督に就任してワールドカップで優勝してくれと言われているようなものだ。

震えが全身を貫いた。相手は、人間が誕生して以来なすすべを持たない恐怖そのものなのだ。

―次話！

排除に続く…。

## ― 第4話排除

### ― 第4話 排除

佐々木が去った後：合川は、オカルト対策室を出て、1人東京駅に向かった。皆川も平野も施設の立ち上げの仕事が有った。自然と二荒清明を確保するのは、合川の役割になる。

合川は、右手首を見た。平野が開発した腕時計型の測定器が数字を表示している。周辺の空間メモリーデータ群の量を示している。

東京駅の新幹線自動券売機の前に合川は居た。

「86%だあ…。」

平野は80%あれば心霊スポットと呼べると言っていた。虚ろな目の人々に合川は、ゾツとした。

名古屋まで乗車券を買い改札を抜ける。ホームに上がると数値は79%に落ち着いた。

さらに、新幹線車両内に入ると20%まで落ちる。車両の素材に遮断能力が有るらしい。

合川は少し気持ちが悪くなったような気がした。のぞみのシートに体を沈めると目を閉じた…。

バンツ…。

驚いて、音がした床を見る。不意を衝かれた合川は、素早く周囲に視線を走らせる。

乗った時と変化は無い…。

右手首の測定器を見る。

94%。

パンツ…。

今度は天井から来た。合川は憑依された乗客を警戒する為に椅子から降りて床にかがんだ。窓を背にしている。

ビシッ…。

窓に亀裂が走るような音が後ろから来た。わずかに背中中に気をとられる。意識を前に戻す。

目の前に、女性車掌の顔が有った。

両肩をつかまれて、座席から通路に引きずり出される。女とは思えない引きと握力だ。合川は逆に車掌を向かいの座席に押した。女性車掌は座席に後ろ向きに転び、合川は覆い被さる形になる。

すると今度は、両足首をつかまれるのを感じた。足が持ち上げられる。女性車掌は立ち上がりながらも肩を離さない。肩と足首で宙に浮いた。座席が視線の方向に流れる。

「外に！」

デッキに出た。もう1人車掌が居て、激しく風が吹き荒れている。乗降口のドアが開いているのだ。

女性車掌の方向に体が運ばれて行く。体がグツと持ち上げられた。開いているドアから、流れ去る街並みが見える。

顔が乗降口から出た。ガツチリと体を固められている。

合川は可能性を探した。

「お客様の安全を最優先します！お客様の安全を最優先します！お客様の安全を…」

肩まで出た。頭の先を何かがかすめて行く。合川は繰り返して叫び続ける。

腕まで出た…そして。

キツィィィィィィッィィィィィッ

長く長く切り裂くブレーキ音が、合川の耳をつんざいた。

風が止まり、合川はゆっくりと車内に戻されて床に下ろされた。

「お客様？。お怪我は有りませんか？。」

肩をつかんでいた女性車掌が、茫然とした顔で聞いてきた。その向こうに、やはり茫然として、非常ブレーキのレバーを握った車掌が合川を見つめていた。

― 次話！

第5話誤爆に続く…

## ― 第5話誤爆

### ― 第5話誤爆

合川は、皆川副長と佐々木に電話を入れた。佐々木とJRが協議して、事態は電装関係のトラブルとして処理された。

名古屋駅に降り立った合川は、再び皆川副長から連絡を受けた。

― 室長。二荒清明の位置が判明しました。名古屋競馬場です。内らち側の桶狭間ポイントの取材を。2時間後の17時に行うようです。―  
― それは、織田信長の？。桶狭間の合戦。―

― 競馬場建設時に、大量の人骨が出た事実があります。― 出た場所で、落馬事故が頻発すると云う事で心霊スポットになってます。どれくらいかの数値が無いので、真偽は不明です。―

― 名古屋競馬場なら、行った事がある。港区だな。―

― 内閣調査室の要員が車両を出してくれます。太閤通り口に出て下さい。新幹線乗り場が有る方です。出て右に歩くと、交番が有ります。そこで待ち合わせになります。―

― 分かるよ。名古屋で半年捜査した事が有るんだ。―

― そうですか。気をつけて下さい。95%を超えるかもしれません。―  
― 何か対策は有るか？。―

― ネットの掲示板の書き込みなので、効果の保証はないんですが。―  
― かまわない。―

― はい。騎手が名古屋競馬場で落馬しないおまじないが有るそうです。それは。今川義元的首。討ち取ったり。。と3回唱えると落

馬しないそうですー

合川はため息を漏らして言った。

「俺は信じるよ。」

携帯を切つて、ホームの階段を下りた。

太閤通り口の交番で、内閣調査室の要員はすでに待っていた。

「柘植つげです。競馬はやられますか?。」

「プレステで、3万鞍以上乗ってる。馬券は、エリザベス女王杯しか買わない。去年までで5連勝だ。」

「それは…フサイチパンドラを?。」

「単勝で当てた。」

「カワカミプリンセスの降着ふちやくを?予想したとでも?。」

「負け無しのカワカミプリンセスを、リーディング5位に入つてない騎手がG1レースで1位に入れるのは、クリアするハードルが多すぎる。スタートか道中か仕掛けか、どこかで必ずミスする。なら、来るのはフサイチだろ?。」

「騎手みたいな読みですね。」

「プレステで3万鞍以上乗ってる。名古屋競馬場もな。名古屋は直線が短い。コーナーを曲がってる最中に仕掛ける。コーナーリングに強い馬なら、追い込みでも差し馬でも勝てる。プレステの中ではね。」

「かなり癖ものの競馬マニアですね。今度、合川さんが騎乗してるレースを見せて下さい。」

「マヤノトップガンに乗せてくれれば、日本優駿を10戦10勝して見せるよ。」

「そりゃあ凄すごい。是非お願いします。」

柘植は本気で興奮しているようだった。

名古屋駅から、柘植の運転する覆面パトカーで走り始めた。熱田神宮を越えた頃、柘植が言った。



「…でも、桶狭間の合戦の場所って特定されて無いらしいですよ。むしろ、豊明の中京競馬場の方がらしくないですか?。」

「サアな。戦国時代は詳しく無いが。名古屋競馬場じゃないと、おまじないが効かんからな。」

「おまじない?。」

合川は、皆川副長の話をした。

「なる程ね。効いたら場所が特定されますね。楽しみだ。」

車は、名古屋競馬場駅の前を過ぎた。時間はまだ16時だ。

「まだ早いですけど…どうします?。」

「二荒清明が来る前にスポットを見てみたい。」

「じゃあ、職員駐車場に入れてくれって事なので、入れます。」

車は名古屋競馬場の中に入った。

競馬場の責任者は、自由に歩き回って良いと云う事だったので、桶狭間ポイントと呼ばれる地点に柘植と歩いて行った。まだ、日暮れには早く空は青い。

コースの内側にハロン棒と呼ばれる数字が書かれた距離表示板がある。そのうちの1本の下に立った。

皆川副長によれば、頻繁に塗り直されて、ゴテゴテしているハロン棒が桶狭間ポイントだと云う事だった。

「…とくに、どうって事なさそうですけど…。」

柘植は、ペタペタと白いハロン棒を叩いて言った。合川は、右手首を見た。

50%。

「低くもなく。高くもない。」

合川は、メインスタンドの方を見た。二荒清明が来るまでには、まだ30分ある。

今日の最終レースは終わっており、人影はない。そのスタンドにポ

ツンと人影がひとつ現れた。

「二荒じゃないですね。二荒ならカメラマンを連れてるはずです。ここからメインスタンドまでは、500mぐらい有る。顔までは見分けられない。」

見ていると、スタンドを降りて来て、外柵そとぶちを越ようとした。

「こつちに?。」

柘植が言い終わらない内に

ドンッ

と云う音が重なった。

人影は吹き飛んだ。

合川と柘植は、500mを全力疾走した。

外柵に叩きつけられている男は、目を剥いたまま息をしていなかった。

「プラスチック爆弾で自爆か…この男。」

絶句した合川の言葉を柘植が継いだ。

「友近信治…赤い爆殺魔…レッドキラーボンバー。誤爆した?。有りえない。」

合川は右手首を見た。

96%。

恐怖で固まる首を無理やり回した。

コースの向こう側に馬群が見える。こつちに向かってくるのが分かった。だが、体は動かない。

「柘植!おまじないだ!3回叫べ!踏み殺されるぞ!。」

「今川義元の首…討ち取ったり…。今川義元の首…討ち取ったり…。今川義元の首…討ち取ったり。」

しかし、馬群は止まらない。18頭が合川と柘植目指して、ひしめき合いながら迫ってくる。

「柘植！。柵の外に出るんだ！」

「動かない！体が！」

「死ぬぞ！なんとかするんだ！」

馬の顔がハッキリと見えて来た。外柵を2列縦隊で迫ってくる。18頭に踏まれたら死体は原型を留めない。馬場に練り込まれてしま

う。

蹄のドスツドスツと云う重低音が全てを圧した。

駄目か…。

合川の視野の端に、大柄なメガネの紳士とカメラマンが見えた。走ってくる。

這いつくばっている合川と柘植に、先頭の馬の蹄が到達した。

「やめるんだ！」

とメガネの紳士が叫んだ。

馬は一斉にいなないて、合川を柘植を飛び越えた。

永遠に続くような時間を掛けて、18頭が通り過ぎた後…静寂が戻って来た。

顔を上げると、二荒清明の顔が有った。

―次話！

第6話月刊オカルトハンティングに続く…。



## ―第6話月刊オカルトハンティング

### ―第6話月刊オカルトハンティング

「大丈夫ですか?。」

メガネを掛けた丸顔が合川を覗き込んでいた。体は痙攣けいれんを起こしたように震えている。なんとか半身を起こそうとすると、男が手伝ってくれた。

「ケガは?有りませんか?。」

合川は震えながら、体を見渡した。

「とりあえず。手足は残ってるようです。」

「私は二荒清明と言います。雑誌に記事を書いています。あなたは?。」

二荒は、柔らかく丁寧に言った。低くよく響く声だった。

「警視庁の合川と言います。あなたに聞きたい事が有りまして…。」

「刑事さんですか?。何でも聞いて下さい。」

「少し落ちつかせて下さい…。」

横を見ると、柘植は完全に失神していた。

競馬場関係者が集まって来て、大騒ぎになった。彼らは18頭もの馬がどうしてコースに入ったのか記憶をなくしていた。うるたえる彼らに、馬の暴走の件は口外くわがいしないようにと落ち着かせた。ただし、友近信治の爆死は愛知県警を呼ばない訳にはいかない。

気がついた柘植に、後の処理を頼んで、合川は二荒清明とカメラマ

ンを桶狭間ポイントに連れて行った。友近信治の写真を撮らない事に対する交換条件として…。

「とりあえず、取材しても良いですか?。」

二荒もカメラマンも、取材を始めた。

二荒はハロン棒の周辺を歩き回りながら、レコーダーに向かってしゃべり続けていた。その様子や二荒が示す場所を、カメラマンは丹念に撮影する。19時過ぎに、愛知県警が現場検証を始めた。

それを見て、二荒は取材を切り上げると言った。

「二荒さん。私は警視庁オカルト対策室の室長を務めています。ご協力を御願いしたい。」

二荒は黙ってうなづいた。合川は右手首を見てから、もう一度二荒を見つめた。数値は0%だった。

現場検証が終わるのを待って、柘植の車に二荒も含めて乗り込んだ。塚ポイントと鳥羽伏見ポイントの話をする、二荒は深くうなづいた。

「…脅迫を受けてまして。私はミステリーレポートと云う雑誌に連載を持ってまして、心霊スポットを回ってるんです。もうひとつライバル雑誌がありまして、オカルトハンティングと云う雑誌なんです。…その編集長が私に取材をやめるように、しつこくミステリーレポートの編集部で電話を掛けて来てるんです。」

「何と?。」

「二荒を心霊スポットに入れるのをやめる。二荒が死ぬぞ…と。まあ、ライバル雑誌なので、編集部はそのつど言い返してあしらってたらしいんです。私は携帯を持ってませんから、まったく知りませ

んでした。でも、鳥羽伏見ポイントの取材の後：編集部と呼ばれて、気をつけると言われました。取材妨害が有るかもしれないと…。」  
「オカルトハンティング…ですか。事情聴取してみましよう。ビツクネームの殺し屋3人に、二荒さんを殺害するように依頼してたかもしれません。」

柘植が続けて言った

「でも…3人共事故死した。するはずのない凡ミスを犯して…。」  
二荒は目を閉じていた。その様子を見て、合川は言った。

「二荒さんは、どうお考えになります?。」

「霊障だと…言わせたいんですか?。刑事さんなのに?。」

「私達は、霊を空間にメモリーされた電気信号として計測する技術を持ってます。友近信治が爆死した時、あの空間には96%の靈魂がひしめいていました。爆弾のエキスパートに有りえない行動をさせるには、充分です。」

そう言うと、二荒は驚いて言った。

「それは、マクナマラ式霊測器ですか?。マクナマラ エレクトロニクスの実験室で研究されていると言う噂の?。」

合川はチラツと右手首を見た。確かに、英語でマクナマラとロゴが入っている。

「そうみたいだ。」

二荒に向かって、表示版を見せた。

「これは、凄い。警察も心霊現象を認めたとはね。でも、何故霊は、殺し屋と刑事さん達を襲ったんだらう?。」

「二荒さんを救う為と云うのは?。」

「何故、霊が私を救うのです?。」

「心当たりは?。」

「バチは当たっても感謝されるとは…思いませぬね。」

合川は、この時右手首の霊測器が0%を表示している意味に気付かなかった。

―次話！  
第7話ラストトラップに続く…。



## ―第7話ラストトラップ

### ―第7話ラストトラップ

名古屋から東京に帰った翌日…。

合川は、皆川副長と柘植を伴って、オカルトハンティング誌の編集部を訪れた。若い記者が応対に出て来た。

「編集長は、不在です。私でよろしければ、お話を伺<sup>うかが</sup>いますが?。」  
くたびれたソファーに、面倒くさそうに促した。

「かまいません。今日は、ミステリーレポートさんの話して事情聴取させていただきます。」

若い記者の表情に、変化は無かった。合川は続けた。

「二荒さんの事で、トラブルが有ったそうですね?。」

「ああ…編集長の個人的な恨みと言うか、何が有ったのかわかりませんが…二荒さんの記事には感情的になる部分が有りますね。もしかして、ミステリーレポートさんが脅迫で?。」

記者は、初めて眉間にシワを寄せた。

「そうではありません。二荒さんの命が狙われた形跡が有りましたね…。」

「編集長が?。二荒さんを?。」

「違います。単に、二荒さんに怨恨が有る人物として、リストアップされてましてね。」

記者は横を向いて、思案を巡らせ始めた。

「…確かに、二荒さんに対して異常に怒っていました。しかし、殺意まで有ると思えません。…つまり、二荒さんの記事がウチの売

り上げを喰ってる訳じゃ有りません。ウチを侮辱したり、オカルト雑誌にあるまじき内容でもないし…。ただ…。」

「ただ…?。」

「二荒さんのレポートでは、結局心霊現象は起こらなかったで終わるんです。連載11回すべてです。これはちよつと異常と言えば異常ですね。必ず何か起こりますからね。起こったのに書かない理由は無いでしょ?。そういう雑誌なんですから。無理してでも、書いてしまうのが普通です。」

「なる程ね…。それが怨恨を産む訳は無い。…所で、編集長さんはどちらに?。」

「今朝は出勤してないんです。奥さんは、いつものように家を出たとおっしゃってましたが…。」

それを聞いた、皆川副長と柘植が同時に言った。

「室長っ!。」

合川は立ち上がった。記者は驚いてのけぞった。

「では。我々はこれで。ご協力に感謝します。…いくぞ。」

合川は2人と共に、足早に編集部を出た。

3人は車に向かって走り出していた。

「二荒の次の取材場所はどこだ?皆川?。」

「長良橋北詰下ポイント。岐阜です。2時間後です。」

「柘植。佐々木さんにへりを要請してくれ。とても間に合わん!。」

岐阜県岐阜市の真ん中を流れる長良川に架かる長良橋の北側…その橋の下に向かって、二荒はカメラマンを連れて堤防を降りて行く所だった。まだ日が沈むまでには1時間ほど有る。

カメラマンの土橋どはしがあたりを見渡して、しかめっ面をした。

「二荒さん。大丈夫ですか？。いつもかも運が良いとは限りませんよ？。」

「3連続と云うのは、運じゃありません。必然ひつぜんです。…どんなかたちで有るにせよ。失敗しますよ。」

二荒は、橋の下に向かってズンズン歩いて行く。

4車線プラス歩道を有しているこの橋は、橋の下も広く橋桁はしげたは、手を挙げても届かない。ここに小屋を作ったホームレスは、最初の夜に、ラップ現象に見舞われて、ことごとく逃げ出した事から、心霊スポットになっている。

「上だね…。」

橋の下は、コンクリートで固められており、橋のたもとに向かって斜面になっている。段がつけられていて、上は平面になっていた。

そこは二荒の身長ぐらいで、水道管か何かの配管が何本かはしっている。

二荒がそこに登ろうとすると、バタバタと音がし始めた。

「へりが？。」

カメラを構えていた土橋が振り返った。そして絶句した。

「…八神編集長？。何を？。」

オカルトハンティング誌の八神やがみが忽然こっぜんと立っていた。

バタバタと云う音が大きくなり、八神編集長の後ろにヘリコプターが現れた。

「八神さん。どういう事でしょう？。」

二荒は努めて冷静に言った。

「気付いて無いのか？。自分のしている事に？。」

八神の目は血走っている。普通ではない。

「分かりませんが？。」

「過去11箇所。日本の代表的心霊スポットすべて…お前は浮遊霊

自縛霊 動物霊を成仏させやがった。このままじゃあ、日本から

心霊スポットが消滅する。」

八神は、そう言って刃渡り10cmちかいナイフをポケットから抜

いた。

「その前に、お前を殺す。銃や爆薬じゃなく、コイツで確実にな！」

「

へりから飛び降りた合川にも、様子は見えていた。しかし、へりの爆音で会話は聞き取れない。

合川は、拳銃を抜いて八神のナイフを狙った。しかし、その向こうにカメラマンと二荒が居る…。

二荒も土橋も八神も

ブーウン

と配管が鳴り始める音に気づいた。

更に、二荒は合川に気づいた。拳銃を構えている合川に、口の形で、マテ ハナレテと合図した。

合川はとっさに仰向けに堤防に倒れて、へりに離陸するように手を振った。

八神は

「グアーツ。」

とナイフを腰だめにして、二荒にぶつかってくる。

ぶつかった瞬間に、二荒の内蔵は刺し貫かれてしまう。

まさに、ナイフの先端が届くギリギリで、八神の体は後ろに吹き飛ばされた。

水道管が裂けて、吹き出た水柱が八神をへりまで飛ばした。運良く、合川の合図でへりは離陸しており、ローターに巻き込まれずに済んだ。しかし、八神はあきらめが悪かった。

地面に叩きつけられても立ち上がって、2度目の突進を始めた。

合川は水柱を浴びていて、八神を制止出来ない。

橋の下に入って行く八神に引き金を引いたが、湿った銃は発砲しない。

銃を捨てて、走ろうとする合川の目の前でそれは起こった。

八神の上だけ

メリメリメリメリッ

橋が崩壊を始めた。二荒とカメラマンは背中を見せて逃げようとしている。

ズンッ。

と云う音の後、轟音と共に、土煙が上がった。

合川は、右手首を見た。

100%。

息を呑んだ。

そして、0%にみるみる落ちていった。

八神は、30分かかって瓦礫の下から救出された。搬送先の病院から、かすり傷ひとつ無い事を柘植が報告してきた。ただし、精神的に崩壊している事が数日後に判明した。

殺し屋と八神の関係については、具体的な証拠を見つける事は出来なかったが、1ヶ月後…仲介していた人物を公安部が確保して、自白させた。

そして、世界は希望を確保した。

二荒清明。

空間メモリーデータを消滅させる能力を持った男。

しかし、政治が失策の果てに軍事的解決に頼る限り…根本的に危機は、永久に去る事はない。

二荒はいつか、寿命を迎える。その時、彼に代わる者はいない。

世界のどこかで、戦火が上がる時、警視庁オカルト対策室がまた、最後の希望になる。

警視庁オカルト対策室 完結

## ―後書き

### ―後書き

作者は結構、オカルト的な事が周りで起こる人なので、普段ホラー物は避けてます。本作も書き込める部分をワザと浅く表現させて頂きました。リアルにすると本当に起こる事がありますので…。日本語の文字は、言霊ことだまがこもってますので、念が入ると発動してしまっんですね。

読者さんも、縁起でもない事を口にする場合は気をつけましょう。その気が無くても念が入ってしまわないように…。

ウーン…怖い。

アイデアとしては、イラクやアフガニスタンで桁違いの死者が出て、霊の世界は大丈夫なんだろうか？。迷った霊が爆発的に増えたら、人間界にも影響が有るんじゃないだろうか？。と云う部分からストーリーを展開させました。2年後の世界崩壊阻止を託された合川と、商売のネタが消滅する事を阻止しようとする八神編集長の対比が見所になってます。

主題は、国家の幸せと、国民の幸せです。この2つは同じではありません。

国家の幸せの為に戦争に行った兵士達が戦死する事は、家族の幸せには繋がりません。

開戦させた人々は、国家の幸せの為にと思っても、戦死者の不幸を無視できる訳では無いと考えます。

この矛盾を産むものが何か？単純に、国家のエゴか国境が有るからか？。それだけでは無いように思います。ホラーの理不尽さの中に、それが有るのではないか？と想っています。素直な感情の指向性が収束する事の危険と、その気持ち良さがホラーを形成しているとも考えられます。

こんな事を考えながら、本作を書きました。どう感じられたでしょうか？。

では、次回作でお会いします。

2009年7月23日

武上溪



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4874h/>

---

警視庁オカルト対策室

2010年10月10日01時32分発行